

マスターズのページ 青春の火は燃ゆ

マスターズ・アスリートが活動 競歩に、トラックに好記録マーク

秋深く肌寒の霜月。月が変わる前の10月には岩手県の北上市で2022全日本マスターズ競歩大会が行われたほか、各地で大会が開催され、好記録に沸いた。これからは駅伝シーズンだが、11月23日の勤労感謝の日には東京・国立競技場で「JMAリレーフェス」が行われ、4×100m、4×400m両リレーと100mでシーズン最後の“サヨナラ・イベント”に熱いレースを繰り広げる。

写真／佐々木文夫さん、日本マスターズ事務局提供

全日本マスターズ競歩大会 日本新10をマーク

日本新記録が10を数えた10月10日に岩手・北上市であった2022全日本マスターズ競歩大会。マスターズのウォーカーの皆さんが東北の陸中路の秋空の下、力いっぱい手脚を動かしながらゴールを目指した。

50kmWでは日本新でゴールした人はいなかったが、50kmWの最年少クラスとなるM25で1位となったのは5時間09分24秒の出羽賢太郎さん(29歳・大阪)。最年長クラスのM70で最も速かったのは6時間34分59秒の八重樫悟さん(73歳・茨城)だった。

日本新記録が生まれた男子5kmWではM24の菊地拓人さん(24歳・岩手)が27分31秒でゴール。また、10kmWでも53分09秒で日本新Vとなった。同じ5kmWのM35は東京で39歳の割柏健太さんが、M55では岩手の55歳である菊地寿さんがそれぞれ別表どりの日本新をマークした。

女子は5kmWと20kmWで4人の皆さんが日本新を出した。5kmWではW55の佐々木あさみさん(56歳・青森)とW70の矢澤美代子さん(70歳・長野)が健脚を披露。20kmWは松本初枝さん(80歳・千葉)がトップ(記録は別表)。

活況を呈した 大阪マスターズ選手権

第36回大阪マスターズ陸上競技選手権大会は10月1日、大阪ヤンマー



5kmW菊地親子の対決。息子の菊地拓人さん(左)はM24の5kmW、10kmWで、父の菊地寿さん(右)もM55の5kmWで親子での日本記録更新を果たした

フィールド長居競技場で行われ、11月号で既報の通り、赤堀弘晃さん(50歳・兵庫)がM50・400mHで58秒24の日本新を出したほか、男女5つの日本新と女子1つの日本タイが誕生した。

まず赤堀さんの400mH58秒24の日本新について。赤堀さんがこの種目に挑んだのは1990年の高3以来、実に32年ぶりだった。高3時の大会は福岡国体の少年A。51秒58で優勝を飾っている。

赤堀さんは400mH以外、100mにも出場し、11秒26(+1.9)でフィニッシュ。M50・11秒33の日本記録を4年ぶりに更新した。そのほか出羽さんがM25・5000mWで25分08秒00と、27分37秒35の旧日本記録を更新。出羽さんはこの日の余勢をかって、9日

後に、先述した岩手・北上市での全日本マスターズ競歩大会のM25・50kmWで1位となった。

M55・棒高跳では東野誠さん(55歳・徳島)が3m92をクリアし、3m90の日本記録を13年ぶりに破った。

女子ではW55・80mHで13秒70(+0.6)のハードリングを見せた中尾晴美さん(56歳・神奈川)が光った。1年前に樹立した13秒81(+1.2)の日本記録を0秒11引き上げる好記録だった。今後に期待大だ。

W60・100mでは本間明子さん(60歳・兵庫)が日本新とはならなかったが、14秒39(-2.0)の日本タイを出し優勝。向かい風であったことが惜しまれた。本間さんが並んだ14秒39の記録は2019年に高橋葉子さん(60歳・神奈川)が出している。

青森リレーチームに声援を送る 岩手の佐々木文夫さん(70歳・岩手)

「すごい人たちですね」と絶賛するのは岩手マスターズの佐々木文夫(70歳・岩手)さんだ。佐々木さんが絶賛したのは青森マスターズのM90のリレーメンバー。「あのメンバーの人たちは体調管理に万全を期して、記録に照準をぴたりと合わせている」と。

佐々木さんは岩手県滝沢市に住み、現在70歳。7年ほど前だったか、青森リレーチームのリーダーを務める田中博男さんと知り合って以後、青森チームの“応援団”を自称している。

「特に大きいのは田中さんの存在ですね。自己コントロールできる人で、原動力があるのでみんなを説得できる。自分自身の実力もM90・100mで16秒69、200mは36秒02のM90クラスの世界記録を持っており、たいしたもの。社会人として立派な人」と尊敬のまなざしを送る。さらに、「青森のリレーメンバーの90代があれだけやれるのですから、“やればやれる”と私たちに元気を与えてくれると同時に、教えてくれている」と話す。

その佐々木さんは古希である現在も現場を回るゼネコン会社に務める。今までプラハやロシアをはじめ欧州各地、上海などアジア各地で活躍した。

マスターズ陸上は15年前の55歳から。100m、200m、400mの3種目にベストを尽くしている。昨年の2020年度の記録集によると、佐々木さんの

M65・100mは13秒80で日本10傑中、ランク7位。200mが28秒93の3位、400mでは1分04秒37でトップとなっている。

コロナ禍前の19年3月には、佐々木さんにとってなつかしいポーランドであった世界マスターズ室内選手権のM65・4×200mRに出て、2走を受け持った。日本チームは1分59秒08で5位入賞だった。

中止が続く全日本マスターズの第40回記念国際イベントではM65・200mで28秒54の5位、400mは1分04秒78で4位と2種目に入賞した。

「コロナ流行で全日本マスターズ大会が中止のままで寂しい。それで各地の大会に出掛けています」と、10月23日には静岡県草薙競技場で開かれた同県マスターズ陸上選手権へ。「当日は天気もよく、遠くに高くそびえる富士山が見えて、気持ちが良かった」。

レースの方はM70・100mが14秒53(±0.0)、200mは29秒53(+2.3)、400mで1分08秒39と、いずれも1位だった。「いやあ、記録が思ったように伸びなかった。100mは14秒を切らないと。200mでは28秒台を思っていたのに」と残念そうな口ぶりだったが、3種目優勝は素晴らしい実績。

岩手マスターズ陸上では事務局長の肩書きを持つ佐々木さんは公私にわたって多忙だが、11月23日に東京・国立競技場であるリレー・フェスとM70・100mに出る予定だ。頑張してほしいマスターズ・アスリートである。



M90の青森リレーチームの応援に励む佐々木文夫さんは、静岡県マスターズ選手権にてM70クラスの100、200、400mで三冠を達成した

末續慎吾さんが 100mで魅せた

さすが末續慎吾さんだ。10月16日に北九州市の本城競技場で行われた第44回北九州陸上カーニバルの男子100m決勝で10秒77(+1.9)の快走を見せた。

レースを観戦した陸上に精通している福岡県水巻町の武尾一三さんは「さすがですね。40歳を越えてあのスタートダッシュには目を見張りました。いいレースを見せてもらい感動しました」と話した。

末續さんは2022年度はマスターズに登録していないため、マスターズのレースではなかった。一方、21年には41歳でマスターズに登録しており、日体大競技会を出した100m10秒78がM40クラスの日本記録となっている。

今回の10秒77はマスターズ記録にはならないが、これまで末續さんはマスターズ陸上でも大変活躍している。近年では18年の第39回全日本鳥取大会で当時M35クラスの100mに出場し、10秒95で1位。200mは人気のあまり棄権せざるを得ない事態に。また、19年の第40回群馬大会では39歳となり、M35クラスには不利な年齢だったが、向かい風1.8mを押して10秒89の大会新Vを決め、喝采を浴びた。

マスターズ未登録は残念だったが、また登録されて、さっそうと走る雄姿を見たいものだ。

2022全日本マスターズ 競歩大会 クラス別日本記録樹立者

	クラス	種目	選手名	年齢	所属陸協	記録
男子	M24	5kmW	菊地拓人	24	岩手	①27分31秒
	M35	5kmW	割柏健太	39	東京	①28分02秒
	M55	5kmW	菊地 寿	55	岩手	①26分20秒
	M24	10kmW	菊地拓人	24	岩手	①53分09秒
	M65	10kmW	佐々木茂	69	青森	①1時間00分47秒
	M25	20kmW	山本幸大	29	愛知	①2時間41分51秒
	クラス	種目	選手名	年齢	所属陸協	記録
女子	W55	5kmW	佐々木あさみ	56	青森	①31分49秒
	W70	5kmW	矢澤美代子	70	長野	①32分53秒
	W55	20kmW	増岡美由紀	58	奈良	①2時間31分04秒
	W80	20kmW	松本初枝	80	千葉	①2時間53分28秒

※記録の前の①は順位